令和 7 年度
教職課程自己点検・評価報告書
（令和 6 年度対象）

中部大学応用生物学部
中部大学大学院応用生物学研究科

令和 7 年 11 月

中部大学　教職課程認定学部・学科（免許校種・教科）一覧

・応用生物学部（応用生物化学科：高一種免許状　理科、農業)、(環境生物科学科：高一種免許状　理科、農業)、(食品栄養科学科食品栄養科学専攻：高一種免許状　理科、農業)、(食品栄養科学科管理栄養科学専攻：栄養教諭一種免許状）
・応用生物学研究科（応用生物学専攻：高専修免許状　理科）

全体評価

応用生物学部・応用生物学研究科では、高等学校教諭 1 種免許状「理科」、高等学校教諭 1 種免許状「農業」のほか、管理栄養士養成課程である食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、栄養教諭 1 種の資格の取得が可能になるように設立当初より教職課程が用意されている。

当学部・研究科では、入学当初の 1 年生から各学期の始めに丁寧なガイダンスを継続して実施することによって、成績判定と教職志望の意思確認をつづけており、適正数の受講者を受け入れることができている。そのため、1 年生当初の希望者のうち､その後の成績基準を満たせないため履修断念にいたる学生が発生するが、毎年一定数の学生が教員免許を取得できている。その一方で、せっかく教員免許を取得しても、教員としての就職を希望する学生が少ない。この問題は、当学部・研究科の教職課程における改善点として教職課程運営委員には意識されているが、必ずしもその他の教員には共有されていない。教員としての就職を希望する学生が少ない原因は明らかにされていないが、教職を志望する学生の一部は教員としての就職を人生設計のなかでの「将来の選択肢の一つ」と捉えているものが多い可能性のほか、採用試験のハードルが高いと感じている者もいる可能性も示唆される。現状では、教職志望の意思確認のほか、学科によっては教職に就いている卒業生との交流や現職の高等学校校長の講話受講を実施してきてはいるが、教職希望学生へのキャリア支援のさらなる充実が必要とされていると思われる。

中部大学応用生物学部・中部大学大学院応用生物学研究科

学部長・研究科長　堤内　要

目次

Ⅰ　教職課程の現況及び特色 ····· 1

Ⅱ　基準領域ごとの教職課程自己点検・評価 ····· 4

基準領域１　教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み ····· 4

基準領域２　学生の確保・育成・キャリア支援 ····· 13

基準領域３　適切な教職課程カリキュラム ····· 21

Ⅲ　総合評価（全体を通じた自己評価） ····· 31

Ⅳ　「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス ····· 32

Ⅰ　教職課程の現況及び特色

1　教職課程の現況

（1）大学名：中部大学

（2）所在地：愛知県春日井市松本町 1200

（3）教職課程の履修者数及び教員数

①　教職課程の履修者数

課程等（通学）　令和 7 年度（令和 7 年 5 月 1 日現在）

【学部】

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1 年	2 年	3 年	4 年	
応用生物学部	応用生物化学科	理科	高等学校一種	9	7	10	9	35
		農業	高等学校一種					
	環境生物科学科	理科	高等学校一種	11	9	11	2	33
		農業	高等学校一種					
	食品栄養科学科	理科	高等学校一種	3	6	2	3	14
		農業	高等学校一種					
		－	栄養一種	5	1	1	4	11

【大学院】

研究科	専攻名	教科	免許種	教職課程履修者数		合計
				1 年	2 年	
応用生物学研究科	応用生物学専攻	理科	高等学校専修	履修登録制度無し		

② 教員数

【学部】

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	16	14	3	1	
備考：別途、教職課程科目担当教員 5 名、教職課程支援員 2 名					

【大学院】

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	18	16	4		
備考：別途、教職課程支援員 2 名					

（4）卒業者の現況

課程等（通学） 令和 6 年度卒業者（令和 7 年 5 月 1 日現在）

教科	免許種	就職先状況											
		認定こども園		幼稚園		小学校		中学校		高等学校		特別支援学校	
		正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他
理科	高等学校一種										1		
農業	高等学校一種									2※	1		

※大学院生 1 名含む

2 特色

応用生物学部の教育研究上の目的は、現代の生物科学の爆発的な発展の状況を受け、21 世紀のバイオ産業すなわち生物の機能を応用して人間生活に有用な物質生産や自然環境保全及び食育環境の向上を目的とする産業及び民政部門で活躍する職業人を育成することにある。

応用生物化学科、環境生物科学科、食品栄養科学科食品栄養科学専攻においては、高等学校教諭一種免許状（理科）と高等学校教諭一種免許状（農業）を取得することができる。食品栄養科学科管理栄養科学専攻においては、栄養教諭一種免許状を取得することができる。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻は、グローバルな視野に立った教養と「食」や「栄養」の分野に関る領域を学ぶために必要な基礎的な学力、「食」と「栄養」に関する専門的知識・技能を持つ。さらに、これらを活用する能力を養成し食を取り巻く種々の状況・問題を理解、解決する視点を持つ教員育成に特色があり、特にこれらの習得のために食品製造・加工学実習が実施できる食品開発研究施設が整備され、この設備を教員養成に活用している点が特徴的である。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻においては、学校での食育推進の中核的役割や地域との連携、学校給食の給食管理業務および食に関する指導の方法について、学校現場での実務経験を踏まえた事例を取り上げながら学習している。就職後、実務に役立つ実践重視型の授業構成にしている点が特徴である。

Ⅱ　基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

基準領域１　教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目１－１　教職課程教育の目的・目標を共有

基準項目 1－1－①

教職課程の目的・目標を、「卒業認定・学位授与方針」及び「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて設定し、育成を目指す教師像とともに学生に周知している。

〔現状〕

教職課程の目的・目標については、本学の建学の精神「不言実行、あてになる人間」[1)]を基本とし、大学としての基本理念と使命ならびに教育目標[2)]、学部・学科ごとの教育研究上の目的[3)]や学部・学科のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシー[4)]を念頭に学部・学科の特徴も踏まえて、それぞれの学科が教員養成の目標を設定し、大学ホームページで広く公表している[5)]。

また、学部･学科を横断する総合的な教職課程の目標について、「豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される教師」をめざす教師像とし、「教職課程ガイドブック」の冒頭で周知している[6)]。

応用生物学部の教育目的は、生物に備わる機能を応用して人間生活に有用な物質生産や自然環境保全、食育環境の向上を目指す職業人を育成することである[3、4)]。

応用生物化学科では、先端のバイオサイエンスとバイオテクノロジーを理解し、これを産業および民生部門で活躍する職業人を育成することを目的にしている。本学科の教職課程ではこの目的に合う次世代を育てる高校教員を育成するために、「教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画」を作成し、履修する学生に周知している。

環境生物科学科では、入学時の学科オリエンテーションにて、学科 DP「環境生物学を理解する基礎となる自然科学の知識と技術を身に付けるとともに、教員として活躍するために要求される知識、技能、調査・情報収集力、課題設定力を習得し、生物多様性を担保した持続可能な社会の実現に貢献できる」資質を獲得するように周知している。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、最先端のバイオサイエンス、バイオテクノロジーに関する基礎教育を基盤として、現代の食を取り巻く種々の状況・問題を理解、解決するための知識や技術を修得し、食品産業界を中心に医薬品・健康産業や生物生産業など広い分野で活躍できる「食」のプロフェッショナルを育成することを理念としている。この理念に立って、科学技術の高度化、産業構造・就業構造の変化、情報化、国際化などの社会変化に対応できる次世代を育てるための高校教員育成を目的としていることを、履修している学生に周知している。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、現代の食の問題を理解、解決するための知識や

技術を習得し、「食と健康」に関するプロフェッショナルとしての管理栄養士・栄養教諭を育成することを目標としており、「栄養教諭一種免」は、児童・生徒に対して一生涯に渡る食生活の基盤となる食教育を担うことができる教師像を目指している[5)]。

以上の本学科・専攻が目指す教師像は大学ホームページにおいて「教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画」としてまとめ、教員間で共有している[5)]。

〔優れた取組〕

高校の科目において、生物と深く関連しているのは理科と農業である。応用生物化学科、環境生物科学科、および食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、この二つの教員免許を同時に取得することができる。

応用生物化学科では科学技術の高度化、産業構造・就業構造の変化、情報化、国際化などの社会変化に対応できる次世代を育てるための高校教員育成を特色としている。

環境生物科学科では、スタートアップセミナー内で田植え実習を経験できる。加えて、卒業研究やフィールド実習において、関連する各教員の研究フィールドで個別に現場での調査研究の一端を学ぶ機会を得ることができ、環境生物学の実践を経験することができる。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻は、「食」と「栄養」に関する専門的知識・技能を持ち、さらにこれらを活用する能力を養成し食を取り巻く種々の状況・問題を理解、解決できる「食」のプロフェッショナルの視点を持つ教員育成に特色がある。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では「栄養教諭一種免」を取得することができる。本専攻では、要件を満たして得ることができる学士及び栄養士・管理栄養士の免許に加え、栄養に係る教育に関する科目（4 単位以上）、「教育の基礎的理解に関する科目」等（18 単位以上）、教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目（8 単位以上）を取得することで「栄養教諭一種免」を取得することができる[7)]。中でも「栄養に係る教育に関する科目」における「現代食育論」では、栄養教諭の役割と職務を理解することに加え、現代の食生活における問題点と課題を理解し、特に乳幼児期・学童期・思春期の心と体を育てるために好ましい食習慣の形成と、食への関心、食を通して生活習慣の確立をする重要性を十分理解し、食育の推進者となるための理論を学ぶ科目とし、教職課程必修科目としている[8)]。以上の内容はシラバスに明記され共有されている。

〔改善の方向性・課題〕

上記専門科目における教員としての必要な資質について、学生自身がより自主的に自覚できるよう指導の頻度や質を上げる必要がある。

＜根拠となる資料・データ等＞

1）中部大学学生便覧 2025 年度、学園建学の精神
2）中部大学学生便覧 2025 年度、中部大学の基本理念・使命・教育目的、p.①
3）中部大学学生便覧 2025 年度、学部および学科ごとの教育研究上の目的、pp.②-⑤

4）中部大学学生便覧 2025 年度、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、pp.⑥-㊷
5）中部大学ホームページ、教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画
6）教職課程ガイドブック
7） 中部大学学生便覧 2025 年度、応用生物学部教職課程（教育職員免許上の取得）、pp. 234-243
8）2025 年度シラバス「現代食育論」

……

基準項目 1－1－②

育成を目指す教師像の実現に向けて、関係教職員が教職課程の目的・目標を共有し、教職課程教育を計画的に実施している。

〔現状〕

教職課程の目的・目標の共有については、毎年年度末に学科・専攻主任および教職課程運営委員会に属する教職課程担当教員を通して各学科・専攻に見直しを依頼しており、その集約した結果を毎年 5 月に更新し、大学のホームページで公開している[1)]。また、教職課程教育を計画的に実施するために、教職課程を志望する学生の把握（1 年生の春学期）と関係学科への情報共有をはじめ、各学期で行われる教職課程ガイダンスにおいて「教職課程ガイドブック」[2)] を活用しながら教職課程の登録から教育実習、教員採用につながる指導を実施している。

〔優れた取組〕

応用生物化学科、環境生物科学科、食品栄養科学科食品栄養科学専攻および食品栄養科学科管理栄養科学専攻に所属する全教員は、教科に関する科目のいずれかを担当しており、教職課程教育の計画的な実施に携わっており、教職課程を履修している学生情報を学科・専攻会議で共有し、指導に役立てている。特に、仮配属後の 3 年秋学期以降において指導教員により教育実習や採用までの過程について各研究室単位でヒアリングし、必要な指導を実施している。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、教職課程に関する資料をクラウドストレージ内共有フォルダで一元管理し、専攻内のすべての教員で共有している。

〔改善の方向性・課題〕

今まで卒業と同時に一括申請により栄養士免許が取得できたが、管理栄養士受験資格に栄養士免許が必要なくなったこともあり、学生本人による栄養士免許の申請に切りかえた。栄養教諭一種免には栄養士免許が必要であるが、栄養士免許の申請時期によっては、栄養教諭一種免の取得が卒業に間に合わない可能性があることを、食品栄養科学科管理栄養科学専攻内の学生や教員に周知する必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

1）中部大学ホームページ、教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画
2）教職課程ガイドブック

基準項目 1－1－③

教職課程教育を通して育もうとする学修成果（ラーニング・アウトカム）が、「卒業認定・学位授与の方針」を踏まえて具体的に示されるなど、可視化を図っている。

〔現状〕

学期ごとに学生自身が学修の成果を履修カルテに記入するとともに、教職課程教員による評価を学生に通知してあわせて記入し、学生が自分の達成度を具体的に確認するようにしている[1)、2)]。

〔優れた取組〕

応用生物化学科、環境生物科学科、食品栄養科学科食品栄養科学専攻および食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、指導教員が各学期のオリエンテーション時に成績を確認し、必要に応じて学生と面談し、今後の履修、学修方法や時間の管理の最適化を指導するとともに目指す資質の共有を図っている。

〔改善の方向性・課題〕

学生との面談時に、学修の成果がまとめられた履修カルテが指導教員と共有されていない場合がある。

<根拠となる資料・データ等>

1）教職課程ガイドブック、履修カルテ・ボランティア活動、p. 11
2）履修カルテ

基準項目１－２　教職課程に関する組織的工夫

基準項目 1－2－①

教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。

〔現状〕

各学科・専攻では、「教科に関する科目」について、「教職課程認定基準」に適合する専任教員を必要数配置するとともに、実務家教員も在籍し、研究者教員との協働体制が構築されている。

また、全学的な教職課程の指導を行うため、人間力創成教育院の専門職教育プログラム（教職課程）に、「教育の基礎的理解に関する科目」等（いわゆる教職専門科目）の担当として「教職課程認定基準」に定められた必要専任教員（4 名）を配置している。ただし、すべて研究者教員である。

各学科・専攻から教職課程担当教員 1 名が教職課程運営委員会に参加して、「教職課程」専任教員や事務職員と連携して教職課程を運営している [1)]。

事務手続等については、教職課程センターを置き、教育実習を含む教職課程に関する事務手続等を行なうとともに、「教職課程」専任教員と協力して、教職課程ガイダンス等を行っている。

〔優れた取組〕

支援員である実務家教員と連携を取って学生支援を行っている。

〔改善の方向性・課題〕

「教職課程」の教員に実務家教員を加えて、実践的な指導や地域との連携を充実させていくことが望まれる。また、教育法科目の多くは愛知教育大学や愛知県総合教育センター所属の教育経験のある教員が非常勤で担当しているが、現状の農業科教育法の担当は教育経験のない環境生物科学科の教員が担当しているため、農業高校等での教育経験を有する非常勤教員を配置することが望まれる。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学教職課程規程　第 5 条

基準項目 1－2－②

教職課程の運営に関して全学組織（教職課程センター等）と学部（学科・専攻）の教職課程担当者とで適切な役割分担を図っている。

〔現状〕

本学では教職課程の運営について、全学的組織として教職課程運営委員会を組織し、対応している。具体的には、「教職課程」専任教員、各学科の教職課程担当教員、教務支援課・人間力創成教育院事務室・教職課程センターの事務員をメンバーとし、課題を協議して分担し対応している [1)]。

教育実習について、教職課程センターは学生と学校や教育委員会等との間に立って事務手続きを行い、情報を集約して各方面に提供し、「教職課程」専任教員は教職課程センターと協力して、教職課程ガイダンスや教育実習ガイダンス、さらに事前・事後指導を行っている。

各学科・専攻の教員は、情報を受けて分担して実習先を訪問し、研究授業を参観して指導を行う。また、各学科・専攻は教職課程履修継続条件を設定し、進級時に履修継続の可否の判断と指導を行っている。

〔優れた取組〕

教職課程センターを置き、主に教育実習に関わる事務手続きや教職課程履修者の登録情報の管理、教員採用・ガイダンス情報の発信などを行い、履修に関わる相談窓口となって、「教職課程」専任教員や各学科の教職課程担当教員と連携して対応している[2)]。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程センターでは、2023 年度から実務経験のある専門職員を支援員として 1 名配置し、2024 年度には 2 名に増員することで日常的に教職指導に応じられる体制づくりを行った。さらに、今後実務経験のある専門職員を複数名配置することで、教職キャリア支援のより一層の充実を図ることが望ましい。

<根拠となる資料・データ等>

1）中部大学教職課程規程　第 5 条

2）教職課程ガイドブック、中部大学のサポート体制、p.6-7

基準項目 1－2－③

教職課程教育を行う上での施設・設備が整備され、ICT 教育環境の適切な利用に関しても可能となっている。

〔現状〕

コンピュータ実習室のほか、教室やラウンジ、食堂などに無線 LAN･ネットワークが整備され、随時、PC を活用することができる。図書館に、教材研究のための教科書や教育関連文献を所蔵するとともに、教職課程センター前にも、教科書などの関連書籍を配置・貸し出している。

学生実験のための施設として、各実験室および講義室にて大型モニターおよびネットワークが整備されている。学生実験室には、それぞれの実験台からみやすい位置に大型のモニターを設置し、説明資料だけでなく実際の実験の様子も見られるようにしている。研究室には共通の機器も含めて様々な実験装置が置かれており、コンピュータによる装置の制御の現場を体験できるようにしてある。

〔優れた取組〕

いくつかの授業科目においてパソコンを使った演習や、プログラミングを指導している[1)、2)]。データの処理やプレゼンを行い、高校の授業の現場でも対応できるような教育を行っている。

各実験室および講義室ではモニターとネットワークが整備されており、リアルタイムでの遠隔講義にも対応可能となっている。

授業前教育として実験手順動画を配信し、実験内容や注意すべき手技について理解を深め、事前事後教育として WEB 上での小テスト等を実施している。

高一種免（農業）に関わる食品製造・加工学実習が実施できるように食品開発研究施設が整備されている。

栄養教諭一種免に関わる献立作成のための栄養価計算ソフトをインストールした PC や体験型栄養教育システムである食育 SAT システムが利用できる実習室が整備されている。学外実習も積極的に行っており、実務経験教員の研究室に所属した学生が学校の食育を研究課題にし、現代の食育の課題を解決する実践力を身につけている。

〔改善の方向性・課題〕

ICT を取り巻く環境は日進月歩であり、様々な接続のための規格が時代遅れとなってしまう。一例として、ノートパソコンの外部ディスプレイへの出力端子の問題があり、講義室が備えるものと学生の PC の間で不一致がしばしば起きている。

実習を行う上で必要となる食品開発研究施設と機器が老朽化しているため、新しい技術に対応した施設・機器の整備が望まれる。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）応用生物学部パンフレット
2）中部大学大学案内

基準項目 1－2－④

教職課程の質的向上のために、授業評価アンケートの活用を始め、FD（ファカルティ・ディベロップメン ト）や SD（スタッフ・ディベロップメント）の取り組みを展開している。

〔現状〕

本学は毎学期末に学生による授業評価・教員による授業自己評価を Web により各科目共通の設問内容で実施している[1)]。授業評価の結果は今後の授業改善のための資料としてや、教員を対象とした教育活動顕彰制度のポイントとしても活用している。

また、全国私立大学教職課程協会や東海･北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会などの研究集会や情報を FD・SD の場として活用している。

〔優れた取組〕

応用生物学部では、上記授業評価における学生からの評価や自己評価について大きな問題がある場合に、学部教務委員会や学科・専攻会議等にて共有し FD の場として活用している。

〔改善の方向性・課題〕

FD,SD 講演会等を開催しているが、教職員の参加率の向上が必要である。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学ホームページ、学生による授業評価・教員による授業自己評価・授業改善アンケート・Cumoc

基準項目 1－2－⑤

教職課程に関する情報公表を行っている。

〔現状〕

教職課程に関する情報公表については、「教員免許法施行規則第 22 条の 6」に定められた情報公開に基づき、以下の項目について毎年 5 月時点での状況をまとめ、大学ホームページで広く公表している[1)]。

1）教員の養成のための目標及び当該目標を達成するための計画
2）教員の養成に係る組織及び教員の数、各教員が有する学位及び業績並びに授業科目
3）教員の養成に係る授業科目、授業科目ごとの授業の方法及び内容並びに年間の授業計画
4）卒業者の教員免許状の取得の状況
5）卒業者の教員への就職の状況
6）教員の養成に係る教育の質の向上に係る取り組み

〔優れた取組〕

教職課程センターと連携して情報公開を行っている。

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学ホームページ、教員養成の状況（情報公表）

基準項目 1－2－⑥

全学組織（教職課程センター等）と学部（学科・専攻）教職課程とが連携し、教職課程の在り方により良い改善を図ることを目的とした自己点検評価を行い、教職課程の在り方を見直すことが組織的に機能しているか、この自己点検評価を通じて機能しつつある。

〔現状〕

教職課程に関する諸問題等については全学の教職課程教員と各学科の教職課程担当教員及び事務職員から構成される教職課程運営委員会を組織し、この会議の中で意思決定をしている。教職課程の自己点検評価の実施について、2025 年度は教職課程運営委員会を 2 回開催し、準備ワーキンググループをつくって検討・準備を進めてきた[1)]。

〔優れた取組〕

『自己点検評価報告書の読み合わせ会』を行い、学部・学科・専攻間で相互理解を深め、

情報公開を図っている。

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

1）2025 年度 教職課程運営委員会第 1 回議事録

基準領域２　学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目２－１　教職を担うべき適切な学生の確保・育成

基準項目 2－1－①

当該教職課程で学ぶにふさわしい学生像を 「入学者受け入れの方針」等を踏まえて、学生の募集や選考ないしガイダンス等を実施している。

〔現状〕

本学に入学を希望する受験生に対しては「中部大学大学案内」[1)] やホームページ[2)] を通して取得できる免許の種類や教職課程に関する注意事項を情報発信している。また、2021年には、高校生向けに開催するオープンキャンパスに向けて教職課程を紹介するパネルを作成して広く教職課程について紹介する試みも行った。

入学後 5～6 月に教職課程履修登録説明会を実施し、教職課程履修条件と履修継続条件を明示し、教職課程の仕組みやスケジュール、免許取得の要件を理解させた上で、教職を志望する意志を確認するレポート（1000 字）を添えて教職課程の登録をさせている[3)]。

オープンキャンパスの際に、教員志望の高校生には求められる資質や教員像について口頭にて伝えている。また、入学時の学科オリエンテーションでも学生便覧の該当項目を確認させ、教職課程の説明をしている[4)]。

〔優れた取組〕

研究室単位にて、教員志望の仮配属・配属生に対しては、随時教員としての求められる資質や教員像について指導教員が指導している。また、卒業生の状況について紹介するとともに希望があれば直接話を聞ける機会を設けている。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、「食品栄養科学入門」や「現代食育論」において管理栄養士の仕事として栄養教諭・教職課程履修に関する説明を実施している[5)]。

〔改善の方向性・課題〕

教員免許を取得しても、教職への就職を希望する学生が少ないので、履修志望者の意思確認の方法や基準について対応が必要であるかを議論すべきである。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学ホームページ、大学案内（デジタルブック）、p. 45
2）中部大学ホームページ、教職課程
3）教職課程履修登録説明資料
4）中部大学学生便覧 2025 年度、応用生物学部教職課程（教育職員免許状の取得）、pp. 238-247
5）2025 年度シラバス「食品栄養科学入門」

基準項目 2－1－②

「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて、教職を担うにふさわしい学生が教職 課程の履修を開始・継続するための基準を設定している。

〔現状〕

本学は、1 年生の秋学期から教職課程の科目を開講しており、1 年生は春学期に教職課程履修に向けたガイダンスの出席と所定の手続きをしなければ、教職課程の科目を履修できないことにしている。

また、学科ごとに通算 GPA 等による基準を設けており、毎年度末にその基準を満たさない場合は、教職課程の継続を原則認めない。だたし、基準を満たさない学生については各学科にて面談等を行い、教職課程継続の意思確認や適切な指導等を行った上で継続を認める場合がある[1)]。

応用生物化学科では学年末ごとに GPA が 2.5 以上であることを履修継続の基本条件としている[2)]。通算 GPA2.3 以上（2.5 未満 2.3 以上）の場合には、教職課程運営委員および指導教授が該当学生と面談を行い、適性や志望理由、今後の学習計画等を指導することにより、継続の有無を判断することとした。

環境生物科学科では、学年末ごとに GPA2.5 以上であることを履修継続の基本条件としている[2)]。通算 GPA が 2.0 以上 2.5 未満の場合には、教務委員と主任もしくは指導教員による面談を行い、本人の他の講義の取得状況と教員としての意志や学びの状況、生活習慣なども含めて確認し、資質や状況に合わせて継続の有無を決定している。通算 GPA が 2.0 未満の場合は、原則、継続を認めていない。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻においては、教職課程履修継続条件を 1 年次、2 年次、3 年次いずれも通算 GPA2.5 以上あることを履修継続の基本条件としている。通算 GPA2.5 を下回る場合は、2.3 以上の場合のみ、指導教授が該当学生との面談を行った後、専攻会議において教職課程履修を継続させるかどうかを判断する。通算 GPA2.3 を下回った場合は履修の継続は認めない。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では GPA2.3 以上であることを履修継続の基本条件としている。通算 GPA が 2.0 以上 2.3 未満の場合は、面談により判断している。また、専攻専門科目を 3 科目以上単位未修得のものは継続不可としている。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では、各指導教員が教職課程履修者を把握し、成績に関する指導を随時実施するとともに、スタートアップセミナーにおける SA、化学の補習授業の指導者アルバイト等の場を設け、教育指導者としての資質を醸成する場を提供している。

環境生物科学科では、学科での各指導教員が教職課程履修者について把握し、成績に関する指導を適宜実施し教職課程に対するモチベーションの確認や他の習得すべき学修とのバランスについて確認している。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻においては、各指導教員が教職課程履修者を把握し、

成績に関する指導を適宜実施し、教育実習等の準備や実施のための指導を行っている。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻においては、実務家教員が必要に応じて学修計画を相談できるようにしている。また、基準を満たさない学生については指導教員とともに面談を行い、今後の就職や意思確認等の適切な指導を行っている。

〔改善の方向性・課題〕

教員免許取得をしても、教員としての就職を希望する学生が少ない点について対応が必要であるかを議論すべきである。

環境生物科学科では、GPA2.5 を下回り、面談を行ったうえで履修継続可とした履修者の中からその年度内に履修辞退する者が出ている。継続条件は今後も定期的に見直す必要がある。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）教職課程ガイドブック、教職課程の履修にあたって、p.9

2）学生に提示する教職課程履修条件

基準項目 2－1－③

「卒業認定・学位授与の方針」も踏まえて、当該教職課程に即した適切な規模の履修学生を受け入れている。

〔現状〕

各学科においては、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに則り学科の教育課程を編成し、豊かな教養と専門的な知識を身につけるべく教育を行っている。教職課程の学生は学科の専門科目を学びながら教職課程の科目も履修する必要があり、1 年生の春学期に教職課程の履修条件と履修継続条件を明示した上で教職を志望する意思を示した者のみ教職課程科目を履修できるようにしている。なお、大学としては教職課程には定員を設けておらず、希望したものすべて受け入れるようにしている。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では、毎年、20 名弱が教職課程を志望している。環境生物科学科では、毎年 15 名前後が教職課程を志望している。食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、毎年、10 名前後が教職課程を志望している。食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、毎年、1 年生時点の教職課程の志望者は 5 人程度、4 学年では 1 人程度（途中辞退者が出るため）である。

教職課程のオリエンテーションが開催前の、1 年時春学期の学科オリエンテーション時に、新入生には教員になりたいことを前提として、卒業要件以外に必要な履修条件や継続のための GPA の確認があること、卒業までの流れなどを適宜説明している。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程オリエンテーションの実施日時などを学科オリエンテーション時にアナウンスできると周知徹底がスムーズである。

〈根拠となる資料・データ等〉

基準項目 2－1－④

「履修カルテ」を活用する等、学生の適性や資質に応じた教職指導が行われている。

〔現状〕

毎学期はじめに行う教職課程ガイダンスで、教職課程の履修指導を行なうとともに、前の学期の学修のふり返りを、学生各自で履修カルテに記入し、教員が確認している。また、いわゆる教職専門科目において、教職をめざすうえで必要な資質･能力を評価し学生にフィードバック、履修カルテに反映させている[1)]。

環境生物科学科としては、各学期のオリエンテーション時に成績を確認し、指導教員による履修指導の必要がある学生に対しての指導を行っている[2)]。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、履修学生の GPA（2.5 以上）及び単位取得状況に基づき、必要な場合は面談を実施し、履修継続の可否について検討している[2)]。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、履修学生の GPA 及び単位取得状況に基づき、必要に応じて適宜面談を実施し、毎年、履修継続の可否について検討している[2)]。

〔優れた取組〕

GPA が規定を満たさない可能性の高い学生に対しては、できるだけ早期に指導教員による面談を行い、教員免許取得の意思確認や本人における取得の意味について確認をしている。

〔改善の方向性・課題〕

学生による履修カルテへの記入に対して、教員からのフィードバック頻度を高める。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）履修カルテ

2）学生に提示する教職課程履修条件

基準項目２－２　教職へのキャリア支援

基準項目 2－2－①

学生の教職に就こうとする意欲や適性を把握している。

〔現状〕

教職課程センターでは、4 年生対象の進路希望調査を、教職課程ガイダンスで定期的に行い、教職志望を把握した上で、情報提供を行っている。

各学期のオリエンテーション時に希望者には、卒業生で教員として活躍している学生の状況などの共有を指導教員が実施している。また、採用試験における専門科目の勉強方法などについての質問についても適宜指導している。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では、指導教授による 1 年生の個別面談が 4-5 月に実施されている。そこで、学生の将来の展望について聞くとともに、教員を目指す学生には教職課程の履修を勧めている。

環境生物科学科では、各学期のオリエンテーションごとに指導教員が必要に応じて教職に関する状況のヒアリングを行い、学生の意欲と適性に応じた指導を心がけている。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、学年指導教授や 4 年生時の配属研究室の指導教授が教職に関しての意欲などを把握し、個別に指導を実施している。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、履修継続意思の確認を毎年行うとともに、4 年次に行われる教育実習の巡回指導を指導教員が実施し、栄養教諭を希望する学生の意欲、適性を把握し、採用試験や受験対策をしている。

〔改善の方向性・課題〕

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、教職に就こうとする 1～2 年生の学生の意欲や適性の把握は、実務家教員がその多くを担っており、組織的な対応が必要である。

〈根拠となる資料・データ等〉

なし

基準項目 2－2－②

学生のニーズや適性の把握に基づいた適切なキャリア支援を組織的に行っている。

〔現状〕

各学科では指導教授やゼミ担当教員を通じて学生のニーズや適性を把握し、その情報をキャリア支援課と共有している。また、キャリア支援課では 2 年生から始まる就職ガイダンスで学生に就職活動の準備を進めるとともに、インターンシップや学内業界研究会、面接指導など行い、4 年生での就職活動のサポートをしている [1)]。

また、教職課程については、適切に編成された教育課程を学ぶとともに、学期ごとにガイダンスを行い、履修カルテを記入することで自分の学びの進行を確認するとともに、教育実習の準備を進めることで教職に対する意思を確認している。

〔優れた取組〕

1 年生から 3 年生までは指導教授が固定されており、シームレスに適正把握とキャリア支援に努めている。3 年生の秋学期からは研究室への配属が行われ、卒業研究を実施する教員が指導教授となり、キャリア支援を引き継いでいる。

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学ホームページ、中部大学のキャリア教育支援体制

基準項目 2－2－③

教職に就くための各種情報を適切に提供している。

〔現状〕

教職課程センターでは教員採用に向けた準備として教員採用試験対策講座の実施、東海 3 県の教員採用試験過去問題や教職関連雑誌の閲覧提供、教員採用試験受験状況の把握、教職求人情報の提供を行っている [1)]。

希望者に対して卒業生で教員をしている卒業生や高学年で教職課程を履修している優秀な学生を紹介し､実際の教育現場を経験した人物から情報を収集する機会を与えている。

〔優れた取組〕

自主性の高い学生においては、教育現場に近い情報がより多く得られるようになっている。

〔改善の方向性・課題〕

情報を閲覧できる大学 HP を改善する。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）教職課程ガイドブック、中部大学のサポート体制、pp. 6-7

基準項目 2－2－④

教員免許状取得件数、教員就職率を高める工夫をしている。

〔現状〕

教職課程センターでは、3 年生の希望者に外部業者の運営する教員採用試験対策講座を提供している。学生の負担軽減のため、大学から半額程度の補助がある [1)]。

また、卒業生の進路アンケートを実施し、教員免許状取得者の勤務状況を把握し、本学

教職課程運営および学生指導の参考としている。また、教職課程センターに寄せられた教員採用情報を掲載し、広く卒業生に対しても公表している[2)]。

「教職課程」教員有志が独自に自主ゼミを組織し、教員採用試験対策や面接指導を行なっている。

〔優れた取組〕

各学科では、教育実習先の高等学校へ指導教授が出向き、本人の特性等について意見交換、情報共有を行っている。教育実習先において、本学卒業生が高等学校教諭として従事している場合には、さらに連携を深める工夫を行っている。

〔改善の方向性・課題〕

教員採用試験対策講座の受講者が減少傾向にあるため、学生のニーズに適しているか、学生に評価アンケートを実施して、見直しを検討していきたい。

高校教員の採用数が減っていることや転職が当たり前のこととなってきた近年の社会情勢を考慮すると、卒業後直ぐで無くてもいずれは教員になりたいと考えている学生は多い。その様な学生には卒業後も継続して情報提供するなどのサービスが必要である。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）教職課程ガイドブック、教員採用試験対策講座、p. 33
2）中部大学ホームページ、卒業生の皆様（教員採用情報等）

基準項目 2－2－⑤

キャリア支援を充実させる観点から、教職に就いている卒業生や地域の多様な人材等との連携を図っている。

〔現状〕

「教職課程」教員が主催して、毎年 12 月に教職についている卒業生数名を招き、2 年生を対象に、教職の実際についてお話を聴く会を開いている[1)]。また、教職実践演習においても、現職の高等学校校長をお招きして、教職の最新事情について講話を聴くことで、教職への希望を新たにしている[2)]。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では、高校教員をしている卒業生を大学へ招き、その経験を現在の学生に話してもらう機会を設けた。

環境生物科学科においては､研究室ごとに本人の希望に応じた卒業生の紹介をしている。

管理栄養科学専攻では、栄養教諭としての就職を見据えた取組を行っている。具体的には、学生の母校の教員を対象に食育に関する質問紙調査を実施し、現代の学校における食育の課題を把握するとともに、その課題の解決方法をゼミ研究として検討し、就職後に栄養教諭として即戦力となる力を養うことを目指している。学校長の了承を得た後、学内の

倫理審査へ申請書を提出し承認を得ている。

〔改善の方向性・課題〕

学科として継続的かつ組織的に行えていない。

学生の母校で研究ができる機会をつくり､積極的に実践力を身に付けようとしているが、倫理審査に時間を要するため、研究先となる学校長の承認が得られた場合は、倫理審査を免除する仕組みの導入が求められる。

<根拠となる資料・データ等>

1）教職課程ガイドブック、教職課程 4 年間の流れ、p. 20

2）教職実践演習（中･高）2025 年度シラバス

基準領域３　適切な教職課程カリキュラム

基準項目　３－１　教職課程カリキュラムの編成・実施

基準項目 3－1－①

教職課程科目に限らず、キャップ制を踏まえた上で卒業までに修得すべき単位を有効活用して、建学の精神を具現する特色ある教職課程教育を行っている。

〔現状〕

本学では、各学期に CAP 制を採用しており、応用生物学部は 1～3 年生で 24 単位[1)]、4 年生は 20 単位としている。一方、教職課程の学生は、この履修上限の制限とは別に教職課程の科目を履修することが認められている。一般の学生に比べ、多くの科目を半期で履修することになるため、教職課程の学生は、学科の学修と教職課程の学修のバランスを考えながら、4 年次に行われる教育実習に向けて学科の教職課程担当教員の指導を受けながら授業を履修している。

〔優れた取組〕

各学期の始めにオリエンテーションが行われる。その時に学科の履修指針が作成され、各学年の目標が全教員の間で共有されている。4 年間での卒業を目標に、漏れのない単位取得のための指導が行われている。

〔改善の方向性・課題〕

管理栄養科学専攻では必修が多いため、教職課程の科目の履修が厳しい学生が一定数いる。入学時点では 10 人以上教職に興味を示した学年でも、1 年後に履修できているのは 3 人のみである。制度上、履修科目数の変更は難しいが、この点を逆に強みと捉え「多くの学びの機会がある中部大学」として充実した教育環境を入学前より積極的に発信し、管理栄養士と栄養教諭の 2 つの免許取得に挑戦する意欲をもった学生を呼び込むことができれば、将来的により多くの栄養教諭の輩出につながると思われる。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学学生便覧 2025 年度、pp. 223-237
2）履修指針（学科内資料）。

基準項目 3－1－②

学科等の目的を踏まえ、教職課程科目相互とそれ以外の学科科目等との系統性の確保を図りながら、コアカリキュラムに対応する教職課程カリキュラムを編成している。

〔現状〕

卒業要件に入らない、いわゆる「教職専門科目」について、人間力創成教育院の専門職教育プログラム（教職課程）において編成し、今日の学校教育を強く意識した「教職課程コアカリキュラム」に対応したカリキュラムを実施している[1)]。

環境生物科学科では、「高一種免（理科）」に対しては、専門教育科目の、(1) 物理学分野では基礎物理学、(2) 化学の分野では基礎化学、無機化学、有機化学、生物化学、など、(3) 生物学の分野では基礎生物学、微生物学、動物生理学、分子生物学、など、(4) 地学分野では基礎地学、地球環境学、(5) 実験分野では、理科 4 分野の基礎的実験の他にこの学科の特徴ある実験を用意している。これらの科目を履修させると共に、教科専門の立場から教員になるための指導・助言を与えている。また、教職課程担当者とは適時連携指導し、特に、教育実習では教科専門の立場から指導・助言を行っている。「高一種免（農業）」に対しては、農業の関係科目として、専門教育科目の、(1) 学部共通基礎科目の分析化学、(2) (3) 学科専門科目では、環境問題入門、バイオマス論、植物遺伝資源論、自然保護論、環境工学、生態学概論、環境動物学、水圏環境学など、そして (4) 実験では、環境植物学実験、水圏環境分析実験、土壌圏環境実験、食品化学基礎実験など、これらの科目を履修させると共に、教科専門の立場から教員になるための指導・助言を与えている。また、教職課程担当者との連携、教育実習での指導・助言も上記と同様に行っている。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、高一種免（農業）において多様な専門科目を俯瞰し教職専門科目との系統性を確保できるような科目を開設している[1)]。

栄養教諭は、学士の学位を有すること、かつ管理栄養士の免許を受けていること又は管理栄養士養成施設の課程を修了し、栄養士の免許を受けていることが基礎資格として必要となる[2)]。ゆえに、食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、学士に加え栄養士または管理栄養士の資格取得に必要な専門性と教育指導の専門家としての資質を培うカリキュラムとしている。

〔優れた取組〕

農業の履修過程では「農学概論」を必修科目としている。この科目では高校の農業の指導要領にある多岐にわたる学問領域についてその概論を講義している[2)]。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻の課程の卒業要件として、管理栄養士国家試験受験資格を取得するための必修科目 87 単位（実験および実習 22 単位、専門講義および演習 65 単位）を含む 124 単位を修得しなければならない[4、5)]。これに加え、栄養教諭としての専門性を高める科目として「現代食育論」及び「学校栄養指導論」を必修科目としている[3、4)]。さらに教育に関する科目として「教育の基礎的理解に関する科目」等（18 単位以上）、教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目（8 単位以上）を履修し、教育指導の専門家としての知識を修得する[3、4)]。

〔改善の方向性・課題〕

専門科目の担当教員への教職課程への意識づけを向上する必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

1）中部大学学生便覧 2025 年度、応用生物学部教職課程（教育職員免許状の取得)、pp. 238-247
2）中部大学シラバス 2025 年度、農学概論
3）中部大学学生便覧 2025 年度、応用生物学部食品栄養科学学科、pp. 223-237
4）中部大学ホームページ、教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画

基準項目 3－1－③

教職課程カリキュラムの編成・実施にあたり、教員育成指標を踏まえる等、今日の学校教育に対応する内容上の工夫がなされている。

〔現状〕

卒業要件に入らない、いわゆる「教職専門科目」について、人間力創成教育院の専門職教育プログラム（教職課程）において編成し、「教職課程コアカリキュラム」と教員育成指標におおむね対応したカリキュラムを実施している。「教職課程コアカリキュラム」は今日の学校教育への対応を求めるものであり、それぞれの科目の意義にもとづき、今日の学校教育に対応する内容を編成している[1)]。

実際に教員として現場で必要になる理科や農学の専門的な基礎知識を意識して学修できるように、各講義内での教職課程履修者への意識づけを行っている。また、実際に現場で必要となるコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上については、各専門科目だけでなく、研究室配属後に各ゼミナールや卒業研究等においても訓練の場が数多く設けられている。

〔優れた取組〕

農学概論では高等学校学習指導要領の概論を講義している。学生が講義内容に沿ったテーマで下調べを行い、その発表を行っている。多数の教員が独自性をもった講義を行っており、学生の評価は高い。

多様な学生との協働による調査研究などにより、教科書では学ぶことの難しい講義運用のための実践力を培うことができる。

応用生物化学科においては、高一種免（農業）では「応用微生物学」「応用微生物学実験」「天然物化学」を必須科目とし、食品化学や製造に関する授業として「食品衛生学」「食品化学Ⅰ・II」を開講している[1)、2、3)]。

環境生物科学科においては、高一種免（農業）では「植物遺伝資源論」、「食品化学基礎実験」を必須科目としている。環境問題に関して、「環境問題入門」、「環境化学」「水質浄化論」を農業の関連科目として開設している[1)、2、3)]。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻においては、高一種免（農業）では今日の学校教育において必要となる食料資源や環境問題に対応できる教員育成を念頭にしたカリキュラム内

容を編成している。すなわち、「食品化学基礎実験」、「食糧問題入門」、「食品化学Ⅰ」、「食料資源流通学」を必須科目としている。食品学に関する実験として「食品学実験」、「食品栄養・機能実験」、「食品分析実験」、「食品製造・加工学実習」を開講している[1)、2、3)]。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻においては、栄養教諭養成課程では、栄養教諭としての専門性を高める科目として設定されている「現代食育論」及び「学校栄養指導論」に今日の学校教育への対応が含まれる。1 年次に「現代食育論」において幼児・児童及び生徒をとりまく食生活・食習慣の現状を、また 3 年次に「学校栄養指導論」で学校での栄養指導の現状、その方法を学び、「給食経営管理基礎実習」及び「給食経営管理応用実習」で栄養教育媒体を作成し、実際に栄養教育を体験する。さらに 4 年次には「教育の基礎的理解に関する科目」としての「栄養教育実習」及び「教職実践演習」において実践するカリキュラムとなっている[1)、2、3)]。

〔改善の方向性・課題〕

なし

<根拠となる資料・データ等>

1）中部大学 2025 年度シラバス

2）中部大学学生便覧 2025 年度、応用生物学部教職課程（教育職員免許状の取得)、pp. 238-247

3）中部大学ホームページ、教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画

基準項目 3－1－④

今日の学校における ICT 機器を活用し、情報活用能力を育てる教育への対応が充分可能となるように、情報機器に関する科目や教科指導法科目等を中心に適切な指導が行われている。

〔現状〕

いわゆる「教職専門科目」について、教科指導法科目、特に「教育方法論」において、ICT 機器を活用し、情報活用能力を育てる指導法を盛り込み、対応を十分可能となるようにしている[1)]。

〔優れた取組〕

応用生物化学科においては、「生物情報リテラシー」「バイオインフォマティクス」「プログラミング」など情報活用能力を高めるための講義を行っている。また、学内で実施されている「AI 数理データサイエンスプログラム」の受講と資格の取得を学科オリエンテーション時に薦めている。

環境生物科学科、食品栄養科学科食品栄養科学専攻および食品栄養科学科管理栄養科学専攻においては、各種講義において様々な ICT 機器および教育システムを使用しており、卒業時までに一般的な内容についてはその活用法を取得することができる。

〔改善の方向性・課題〕

「教職専門科目」の仕上げとなる「教職実践演習」においても、ICT 機器を活用し、情報活用能力を育てる指導法を確実に習得できるよう、シラバスに明記し充実させていきたい。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）中部大学 2025 年度シラバス、教育方法論

基準項目 3－1－⑤

アクティブ・ラーニング（「主体的・対話的で深い学び」）やグループワークを促す工夫により、課題発見や課題解決等の力量を育成している。

〔現状〕

教職課程に限らず、本学の授業では個人またはグループでそれぞれの課題を設定し、調査・発表を行い、その後ディスカッションをする形式の授業が数多く開講されており、これを受講することで課題発見や課題解決等の力量を育成している。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では、「スタートアップセミナー」や学生実験、ゼミナールにおいて~~は~~個人あるいはグループワークを中心とした活動を行い、協働して成果を上げるためのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を育んでいる。一方、講義科目では 100 名以上の講義が多いが、ディスカッションの機会を設け、主体的な学びを実践するとともに、アクティブラーニングの手法を学ぶ機会としている。

環境生物科学科では、「スタートアップセミナー」、フィールド実習（新・森の健康診断[1)]）や研究室配属後の各ゼミナールや卒業研究等において、合意形成や課題発見・課題解決の訓練の場が数多く設けられている。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、「スタートアップセミナー」や「食品栄養科学入門」、学生実験、研究室仮配属後のセミナーなどを通じて、個人あるいはグループワークを行い、効率的な協議を進めるためのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を育んでいる。

〔改善の方向性・課題〕

100 名以上の講義科目におけるアクティブラーニングの実践が不十分であることから、FD により、手法の周知が必要である。

〈根拠となる資料・データ等〉

1）新・森の健康診断プログラム（2021 年度版）

基準項目 3－1－⑥

教職課程シラバスにおいて、各科目の学修内容や評価方法等を学生に明確に示している。

〔現状〕

教職課程に限らず、本学はシラバスにおいて各科目の授業計画（毎回の内容）や授業方法、成績の評価方法及び評価基準を学生に明示している。

〔優れた取組〕

栄養に係る教育に関する科目として「現代食育論」「学校栄養指導論」のシラバスを学生に明示している [1)]。シラバスのピアレビューシステムにより、より具体的で実践的なシラバスが明示されるようになっている。

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

1) 中部大学 2025 年度シラバス、「現代食育論」
2) 中部大学 2025 年度シラバス、「学校栄養指導論」

基準項目 3－1－⑦

教育実習を行う上で必要な履修要件を設定し、教育実習を実りあるものとするよう指導を行っている。

〔現状〕

教職課程履修継続条件の上に、教育実習に参加するための履修要件を、「3 年次終了までに、履修すべき「『教育の基礎的理解に関する科目』等」および「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。)」の必修科目をすべて修得していること。」と定め、「教職課程ガイドブック」に明記し、修得したことをふまえて教育実習に参加するよう、ガイダンスや事前指導において繰り返し指導している [1)]。

環境生物科学科では、3 年および 4 年時の春学期において指導教員による教育実習に関わる履修および教育実習のタイミングなどについての確認・指導を行っている。

〔優れた取組〕

なし

〔改善の方向性・課題〕

なし

<根拠となる資料・データ等>

1）教職課程ガイドブック、教育実習について、pp. 22-23

基準項目 3－1－⑧

「履修カルテ」等を用いて、学生の学修状況に応じたきめ細かな教職指導を行い、「教職実践演習」の指導にこの蓄積を活かしている。

〔現状〕

毎学期はじめに行う教職課程ガイダンスで、教職課程の履修指導を行なうとともに、前の学期の学修の振り返りを、学生各自で履修カルテに記入し、教員が確認している。また、いわゆる教職専門科目において、教職をめざすうえで必要な資質･能力を評価し学生にフィードバック、履修カルテに反映させている [1)]。

〔優れた取組〕

なし

〔改善の方向性・課題〕

履修カルテは、教職課程で学んだことが集約されているはずなので、教職実践演習の指導に活用していきたい。

<根拠となる資料・データ等>

1）履修カルテ

基準項目　３－２　実践的指導力育成と地域との連携

基準項目 3－2－①

取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する機会を設定している。

〔現状〕

教育実習事前指導の一貫として、教育実習を予定している教科等の指導案の作成とそれを用いた模擬授業の指導を行い、実践的指導力の育成を図っている。

〔優れた取組〕

応用生物化学科では化学の補習を「ミニマム化学」という履修課程外の科目として行っている。そこでは学生同士の学び合いを行うようにした。特に、教職課程を履修している学生には指導する側として参加するように声をかけた。同様に、スタートアップセミナー

においても教職課程を履修している学生の活用を図っている。

栄養教諭においては、履修者全員が少なくとも 1 回以上模擬授業を実施している。履修者が 1 人のみの年は、児童生徒役として他の学生を募集し協力を得ながら模擬授業を行っている。さらに、地域連携の一環として高蔵寺のグルッポふじとうやこども園などにおいて実践できる機会を積極的に設けている。

〔改善の方向性・課題〕

ミニマム化学実施時間と教職課程履修者向けイベント開催時間が複数回重なったため、ミニマム化学実施計画時に教職課程イベントのスケジュールを確認する必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

なし

基準項目 3－2－②

様々な体験活動（介護等体験、ボランティア、インターンシップ等）とその振り返りの機会を設けている。

〔現状〕

教職課程センターでは、学校ボランティア募集の情報を掲示板やホームページで案内している。また、コロナ禍以前では学校見学や学校一日体験を企画・実施していた。また、「教職課程ガイドブック」）[1)] に体験活動を記録するようにしている。

〔優れた取組〕

なし

〔改善の方向性・課題〕

栄養教諭は、児童生徒の食育指導に加え、地域に貢献する管理栄養士を担うことから高齢者の栄養講座の支援体験を充実させる必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

1）教職課程ガイドブック、充実した学生生活を送ろう、p. 19

基準項目 3－2－③

地域の子どもの実態や学校における教育実践の最新の事情について学生が理解する機会を設けている。

〔現状〕

「教職課程」教員が主催して、毎年 12 月に教職についている卒業生数名を招き、2 年生を対象に、教職の実際についてお話を聴く会を開いている [1)]。また、教職実践演習においても、現職の高等学校校長をお招きして、教職の最新事情について講話を聴いている [2)]。

〔優れた取組〕

食品栄養科学科管理栄養科学専攻では、2017 年より春日井市立の小学校において、春日井市役所教育委員会学校給食課を通して、栄養教諭の指導のもと 1・2 年生による食育劇を行ってきた。2024 年度より各種児童園、こども園、保育園において、栄養教室や食育指導、給食指導を行っている。これらの活動を通して、近隣市町村における児童や園児の実態、小学校における教育実践の最新事情に関して理解を深めている [3)]。

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

1）教職課程ガイドブック、教職課程 4 年間の流れ、p. 20
2）中部大学 2025 年度シラバス、教職実践演習（中・高）
3）平成 29 年広報春日井市 No. 1620 、p. 13

基準項目 3－2－④

大学ないし教職課程センター等と教育委員会等との組織的な連携協力体制の構築を図っている。

〔現状〕

毎年 1 月に開催される愛知県教育委員会の主催する「教育実習受入れに関する打合せ会」に参加し、実習校からの反省点や要望を持ち帰り、教職担当教員と共有することで、次年度以降の事前指導に活かしている。また、その際に次年度の「教育実習受入れ要項」が配布されるので、要項に従って申込み等を行っている。

〔優れた取組〕

なし

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

なし

基準項目 3－2－⑤

教職課程センター等と教育実習協力校とが教育実習の充実を図るために連携を図っている。

〔現状〕

教育実習について、教職課程センターは、学生と学校や教育委員会等との間に立って事務手続きを行い、情報を集約して各方面に提供している。

「教職課程」専任教員は、教職課程センターと協力して、教育委員会の「教育実習打合せ会」に参加し、その総括をふまえて、教職課程ガイダンスや教育実習ガイダンス、さらに事前・事後指導を行っている。

また、各学科の教職課程教員は、情報を受けて、分担して実習先を訪問し、研究授業を参観して指導を行う。

〔優れた取組〕

なし

〔改善の方向性・課題〕

なし

〈根拠となる資料・データ等〉

なし

Ⅲ．総合評価（全体を通じた自己評価）

応用生物化学科の教職課程は例年 20 名ほどの学生を受け入れている。教員志望が強くても進級時に成績（GPA）によって履修を断念せざるを得ない学生がいる一方、成績は良好でも教職課程履修の負担感や教育実習先での自信喪失など、免許状取得に至らない場合が多い。このため、最終的に免許取得に至るのは 10 名程度になっている。指導教授によるサポートを継続しつつ、教職課程履修生同士、同級生だけでなく学年を超えて、助け合い、情報共有できるネットワークを構築するような工夫が必要である。

環境生物科学科としては、教職課程を取得するための専門科目の運営および施設等の準備について、良好な環境の提供ができている。さらに、教職課程担当事務局と学科教務委員との連携は十分とれており、特筆すべき問題もない。一方、指導教員による学生への指導は、多くの場合問題のある場合に対してであり、より質の高い学びを目指す学生にとっては指導が不足している面もあるかもしれない。また、専門科目においては、教職課程の一環になっていることを教員が再度認識を高め、より質の高い学修を提供できるようにすることが、全体的な課題である。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻においては、高度化、複雑化する食に関する状況や課題を十分に理解させ、さらに食料資源や環境問題に関しても網羅し対応できる教員養成を念頭にしたカリキュラムを持っている。また、食品製造・加工学実習が実施できるように食品開発研究施設を有する点で、専攻の特徴を十分に踏まえた教員養成内容となっている。一方、指導教員による学生への指導を行うのは、多くが履修継続に問題がある場合であり、より質の高い環境を整備するためには、教職課程担当事務局と学科教務委員との連携を深める必要があるのかもしれない。

食品栄養科学科管理栄養科学専攻での栄養教諭の教職課程において、その教育の目的及び目標は学生便覧、大学ホームページにおいては「教員養成のための目標及び該当目標を達成するための計画」としてまとめ、共有している。教職を担うべき適切な学生の確保・育成のために、履修学生の GPA 及び単位取得状況における基準を設定するとともに、必要に応じて面談等を実施している。栄養教諭においては、学士の学位を有すること、かつ管理栄養士の免許を受けていること又は管理栄養士養成施設の課程を修了し、栄養士の免許を受けていることが基礎資格として必要となる。ゆえに CAP 制を踏まえた学士及び栄養士または管理栄養士の資格取得に必要なカリキュラムに加え、バランスを考慮して教職課程の学修カリキュラムを編し、実施している。さらに近隣市町村の児童保育施設における栄養教室や栄養指導、給食指導の実施を通して、地域と連携した実践的指導力の育成、児童や園児の実態・教育実践の最新事情に関する理解を深める取り組みも行っている。

Ⅳ　「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス

教職課程運営委員会において各学科・専攻の運営委員に対して、「教職課程自己点検評価報告書」作成実施が告知された。それとともに各教職分野の代表者によるワーキンググループが編成され、評価項目・作成基準などの案が提案され、運営委員会において承認された。学科・専攻の教員に対してはそれぞれの教職課程運営委員を通して委員会承認内容が報告された。

応用生物化学科では原案を教職課程運営委員が作成し、その後 Google Classroom において共有した。すべての教員が原案を見ることができると同時に、その場で文案を改訂することができるようにした。自己点検で記入が求められていることをそれぞれが確認することで、教職課程を維持・存続させていくために必要なことを理解できるようになった。提案された内容を運営委員が加筆・修正し、最終版とした。

環境生物科学科では、事前に学科会議において教育課程における各教員からの意見を収集し、学科教務委員と主任により素案を作成し、最終的に学科会議にて共有して作成した。

食品栄養科学科食品栄養科学専攻では、教職課程運営委員が専攻の内容を自己点検して大まかなたたき台を作成し、さらに専攻主任と相談しながら加筆修正を行った。専攻内の教員には、あらかじめ教職課程での現状や特色、課題を検討いただきながら、報告書案を専攻内の教員に送付し、意見等をとりまとめて最終的な報告書とした。

栄養教諭における報告書は管理栄養科学専攻が作成・承認し、学部に提出した。

各学科・専攻より提出された報告書を基に、学部の報告書としてとりまとめをした。最終的に各教職課程運営委員に確認し、学部の報告書として提出をすることとした。